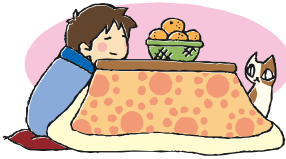




健康人で行こう!

暖房器具の事故に気をつけて!



昨今の節電意識の高まりから、エアコンは使わず、代わりに“灯油”や“ガス”などを使った暖房器具に注目が集まっています。ただし、こういった暖房器具は使い方を間違えると、思わぬ事故につながる危険もあります。

そこで今回は『暖房器具による事故とその予防策』をお伝えさせていただきます。

暖房器具の事故 1

一酸化炭素中毒

部屋を閉め切ったまま石油ストーブを使っていると、酸素が不十分になり、ストーブの不完全燃焼が起って“一酸化炭素”が発生します。この一酸化炭素を吸ってしまうと、全身に酸素が行き届かなくなってしまいます。これにより中毒症状が発生し、重症化すると死に至る場合もあります。しばらく使っていなかった旧式の暖房器具を使う場合は十分注意しましょう。

症状は?

空気中の一酸化炭素濃度が**0.04%の場合**、1～2時間で「頭痛」が起こります。**濃度が0.16%**になると20分で「頭痛」「めまい」「吐き気」「けいれん」、その後「意識障害」、そして2時間で「死に至る」といわれています。

予防方法

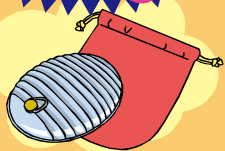
一酸化炭素は無味無臭なので、部屋に充満しても気がつきません。したがって、一番の予防策は定期的な“室内の換気”です。室内で石油ストーブやファンヒーターなどを使用する時は、必ず“1時間に1～2回換気をして新鮮な空気を室内に取り込みましょう。”

一酸化炭素中毒が疑われたら

すぐに暖房器具を止め、窓を開けて換気しましょう。この時、中毒が発生している人に温かい毛布などをかけて温めましょう。もし、呼びかけても意識がなかったり、呼吸していない場合は、すぐに救急車を呼びましょう。

暖房器具の事故 2

低温やけど



“低温やけど”とは、40～60℃くらいの“熱いと感じない程度の温度でやけどすること”です。電気毛布やカイロなどが、体の同じ場所に長時間あたることで起きてしまいます。あたっている時間が長いほど重症化してしまい、一般的なやけどとは異なり痛みはあまりありませんから、気づくのが遅れてしまう場合もあります。

起こしやすい人や状況

就寝中

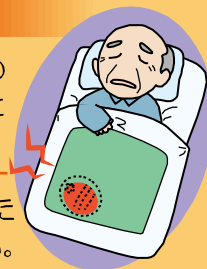
就寝時、電気毛布や湯たんぽの熱が体の同じ場所にあたることで起きてしまう。

高齢者

皮膚の感覚が鈍くなっているため、低温やけどを起こしやすい。

糖尿病のある人

糖尿病で神経障害のある方も、皮膚感覚が鈍くなっているため、低温やけどを起こしやすいと言われています。



予防するためにできること

電気毛布を使う場合

布団が暖まったらスイッチを切りましょう。

湯たんぽを使う場合

タオルなどでしっかり包み、手足が温まったら布団から取り出しましょう。

カイロを使う場合

長時間同じ場所に貼らないようにして、少しでも熱と感じたら使うのはやめましょう。

低温やけどが疑われたら

“皮膚がヒリヒリして赤くなっていたら”低温やけどを疑った方がよいでしょう。もし低温やけどが疑われたら重症化している場合もありますので、自己判断せずに必ず医療機関で診てもらいましょう。



暖房器具の事故は、場合によっては取り返しのつかない事故につながる恐れもありますので、ご使用には十分注意しましょう。